

二尊会由来畧記

今月十九日より二十一日まで虔修する二尊像下附五百年記念法要に際し、先住第十五世樹法院釈鉄城法師の筆録した円鏡山覚勝寺沿革并由緒（明治四十三年七月調）より二尊会に関する文章を抜鈔して一小冊子とし、当寺門徒、有縁の同行に頒ち、既往の史蹟、由来を明らかにして、又将来の殷鑑に資せんとするものです。

文明十三年七月六日御裏書釈蓮如御判の二尊御影像（親鸞聖人・蓮如上人の二方御連座）（今から五百年程前）江州中郡十八日講中（十八日は蓮如上人の御尊父存如上人の御命日）の由来について

開基慧宗 其俗姓を佐々木と云い幼年の頃出家剃髮して三井寺積善院に僧となる。（その父は犬上郡西村田中村（安食中村という）を領有し潜居す。依て今に至るまで当寺家来の中西村を名乗り田中をなめる者あり古記の内に西村三九郎、田中兵九郎というもの御座候：：当寺九代玄靈の安永八年本山よりの永代余間列座の時の由緒書より：：。後四方に歴遊し終に当村辰巳の方にありし天台宗円満寺と云える一院に來り茲に住持す。その後京都に上り諸方に遊學す。時しも真宗本願寺八世蓮如上人は日夜に道俗を勸化し宗旨を拡張し玉ひ大谷の一流漸く再興せんとす。茲に於て延曆寺の憎徒等真宗の隆運を妬み終に大挙して夜襲し本願寺の殿舎を焼く。上人は仏祖の尊像を奉じて諸方に難を避け給える折なりき。この時慧宗は親しく上人の勸化に遇い忽ち帰服して勤仕し粉骨碎身以て上人を擁護し周旋せり。上人嘉賞し玉ひ褒美として御直筆の六字名号、五条袈裟を賜わりかたく直弟とし給へり。慧宗感涙し退きて円満寺に歸へり寺を改転して村の中央に移し、（今に小字名として円満寺、馬場、馬場一——馬場三の地名あり。）四方の檀徒を勸進して真宗に誘導し、遂に寺基を造り茲に一寺を開闢す。依りて蓮如上人は円明鏡山光顯院覚勝

寺と号命し給ふ。是を覚勝寺の開基創始とす。(年時不詳なるも上述の事実より見れば寛正六年(一四六五)より文明五年(一四七三)の間ならんか。)慧宗は是より専ら本山に奉仕し特に当国中郡に於て番方講(今時の講名なり。)なるものを組織し、労を尽して遠近の檀徒を教諭して各々之を帰服せしめ遂に大講社を結ぶに至る。爾来此講日に増し隆盛を極めけるが上人地方御巡教の時当寺に立ち寄り給ひ、御満足のあまり御自像を彫刻し玉ひ之を御形見として慧宗に授与し玉ふ。

方御巡教の時当寺に立ち寄り給ひ、御満足のあまり御自像を彫刻し玉ひ之を御形見として慧宗に授与し玉ふ。

又前記の二尊絵像を文明十三年七月六日付で下附された。其慧宗は寺務を実子永宗に譲り大永四年正月廿五日死去す。(以下当時伝来の宗祖聖人の御木像の由来記述あるも省畧す。)

二世永宗 父慧宗の業を継ぎ大いに番方講の興隆に尽砕し、本願寺第九代実如上人の恩顧厚く特に御文章三通御直筆を以て永宗に御下附相成り、永宗は之れを以て法業の勧誘すべき旨を命ぜらる。永宗は能く其意を軀し講の繁栄に労を尽したりしかば上人は賞与として水晶の念珠を賜はる。又其後元龜四年三月廿八日 第十一代顕如上人より第十代証如上人の御影を下し玉ふ。天正八年正月八日死去す。

三世永尊 父祖の造詣を嗣ぎ増々番方講に尽力し弟子西空と共に法業を引立てしかば此講愈隆盛を極めたり、茲に於て本願寺第十二代准如上人より賞与として永尊二十一才の時飛檐列席御免の恩典を賜はり、且つ慶長六年二月十七日付を以て御開山聖人の御影像を下し置かれたり。

又西空(大洞弁天本地堂の当国古城主等名に南源院梅岩道香居士 今村城主 今村帯刀 青松院休庵素心居士 今村屋敷主 今村西空とあり。)と云へる人は名望もあり道心誠に深く難有き篤信者にして当国は勿論他国の人々まで喜んで其の化を受け帰依するもの多く、当村をば人呼んで西空今村と称するまでに

至りしと云ふ。かゝる有様なりしかば本山よりは特別に西空に対して光顯寺と云ふ寺号を下げられ、准如上人よりは覚如、顯如而上人御連座御影（慶長九年三月十日付）七高祖・聖徳太子御影（慶長十年二月朔日）等を賞与として下附された。又彦根城主よりは小袖等を拝領せし程の希有人なりき。

それは永尊、西空兩人が法義の上からのみならず開出今村の東側にある犬上川の堤防護岸の土木工事を興し永く町民を洪水の難より救ひしがためならん。何故とならば、当寺第四世玄尊の坊守は丹波国綾部領主別所豊後守の娘にして第五世永玄及一男を生み病死す。時に彦根城主直孝は鷹狩りの道中一宿せられ当寺の不幸を聞き、公の側室たる若狭少将豊臣勝俊の娘五味金右エ門豊直の姉にして直孝長子靱負佐直滋公の実母を遺はして玄尊の後妻とせられたり。依りて直孝より別にぬしやり屋敷と称して当寺境内に引続きたる地面を寄進して別殿を建築して当てけり。其の後坊守は寛永十年八月一日死去法名智光院殿と言う。

（直滋の事は彦根市史等に詳細に記せり。）それ程の住職であり、又西空は当村の今村屋敷主なりしかば事業も出来しならん。

さればこの兩名こそ当村住民の守護者と云うも過言ならず、故に宝暦年間の大洪水の時犬上川も亦破壊されんとし村民全挙して防禦せる際、二人の奇憎忽爾として来り防禦さる。而も此二僧とは覚勝寺の二尊御影なりとの伝説今に村人深く信じて口伝せり。永尊、西空二僧の事跡百五十年後の洪水の時にまで村民に恩恵を与え、それを二尊の御影に功を帰して今日まで語り伝へられしこと真に奥床しき美談なり。斯くて永尊は本山の恩顧他に別せる所なりしが慶長十九年正月十八日死去す。

以上先住の覚勝寺沿革并由緒記を畧記す。その後歴代の住職番方講の発展に寄与するとともに、又当寺としては十八日講中を中心として法義相続、本願寺護寺に御報謝の懇念を運び、連綿として今日に至るまで二尊会法要を虔修してきた次第です。

因みに明治中期頃の文書に覚勝寺肝入として橋米集人足割簿とある中八坂村、須越三津屋村、泉寺村、明樂寺中沢村、筒井五僧田安田村、嶋村、清水村、北町天満、賀田山、稲里、上四ヶ村、甘呂村、彦根、当村の各々米、金銭の収入帳、又巡礼街道の犬上川の橋掛け替え工事の費用、人足帳のあるのに徴しても、覚勝寺二尊会と犬上川との深き因縁が知られます。

この様にして今日も覚勝寺門徒開出今在住者は、葬儀、年忌、お取越の節御本山と誌した懇志を上げ御本山御正忌報恩講に際し寺世話代表及有縁の同行挙ってその金穀を上納し、お斉を頂戴するのが住例となつています。

以上劣齋十六世住職積憲城 二尊会の由来の一端を記しました。

合掌

昭和五十四年十月